

令和 7 年産

JAえちご中越 さんとう地域「わたぼうし」栽培暦

契約栽培もち米生産者部会

月

4 月

5 月

6 月

7 月

8 月

9 月

日

510152025

510152025

510152025

510152025

510152025

5101520

出穂前後日数

-22-120+36

種子消毒
(温湯消毒)

浸種開始

催芽

播種

【作業目安】

4月3日

4月13日

4月15日

播種量の目安：140g／箱

育苗日数は
20日程度

田植え
5月5日

中干し開始
6月5日～

最高分けつ期
6月25日

1回目穂肥
7月7日

2回目穂肥
7月17日

出穂期
7月29日

収穫期
9月3日～

稲わら秋すき込み

《稚苗の規格》

草丈

12.0cm

葉 齢

2.0～2.3 葉

第1葉鞘長

3.0～3.5cm

緑化終了時の
苗丈めやす

3.0～3.5cm

無駄な茎を
とり過ぎない

刈刈ウィーク
6/7～14

刈刈ウィーク
7/5～12

的確な生育診断による適切な穂肥施用

病害虫防除の徹底
(イネ墨黒穂病・いもち病・紋枯病・カメムシ)

気象予報と出穂以降の積算温度
にもとづく「刈取計画の策定」

75cm

350本

穂長 75cm

m²穂数 350本

60本

12cm

m²茎数

草 丈

280本

30cm

50cm

42.0

38.0

470本

430本

65cm

葉 色

全ほ場で溝切りを実施

【いもち病予防】
ルーチンブライト箱粒剤
播種時～移植当日

除草剤散布

“補植苗”を
早期に撤去する

6月中旬～
葉いもち病
〔早期発見
早期防除〕

【イネ墨黒穂病・いもち病防除】
★必須防除★ オリーブライト250G
出穂前20～10日(7月9～19日)
いもち病緊急防除：ブラシン剤(収穫7日前まで)

【カメムシ防除】
穂ぞろい期
スタークル剤

収穫前のほ場でイネ墨黒穂病害粒の有無確認!!
午後からの刈り取り・刈り分け徹底!

・田植後→3～4cmのやや深手で植え傷み回避
・活着後→2～3cmのやや浅手で早期分けつ促進
・除草剤散布時→湛水状態(水深5～6cm)で散布
・中干し開始まで→浅水更新でフキの発生防止

やや深水

一時湛水

浅水更新

生育量を把握して遅れずに!!
小ヒビが入る程度になったら終了

中干し・溝切り

飽水管理の継続 ⇄ タメ水厳禁
(異常高温時には一時湛水)

フェーンの発生時：地域の水利条件等に応じた
夜間水温を下げるこまめな水管理の徹底

出穂後 25 日以降に
最終かん水を実施!!

落水期

Point 1

～適正な作業計画の策定により
健苗を育成します～

① 適期播種、適正な播種量、育苗期間
20日程度で健苗を育成

② 土壌診断結果にもとづく土づくり
資材(有機質・ケイ酸)の施用

③ 作土深15cmの確保～ほ場条件に応
じた適正量の基肥施肥→基肥N施
肥量のめやす：「10a当たり4.0～
5.0kg」→極端な多肥栽培を避ける

Point 2

～適期田植えの実践で
初期生育を確保します～

① 移植前追肥(べんとう肥)の施用→
活着・初期生育を促進

② 田植期のめやすは5月5日
・栽植密度：60株／坪
・植付本数：3～4本／株
・植付深さ：2～3cmの浅植え

③ いもち病の発生しやすい地域・ほ場
では予防防除(箱施用剤)を徹底→
補植苗を速やかに撤去

Point 3

～生育状況にあわせた生育調節で
過剰生育を抑制します～

① 目標穂数の80%(280本／m²=
1株あたり16本)を確保してから
→適期中干し開始

② 全ほ場で溝切り(10条：3mに1本)
→速やかなかん水・排水管理

③ 本格的な梅雨入り前にしっかり地
固め→中干しは小ヒビが入る程度
になったら終了～遅くとも出穂30
日前までに飽水管理へ移行

Point 4

～病害虫防除と水管理の徹底で
稲体機能を維持します～

① ★【必須】★イネ墨黒穂病の予防防
除(オリーブライト剤)を徹底

② 中干し以降は、田面が強く乾く
ことのないよう飽水管理を継続
(強い中干し・タメ水→厳禁)

③ 出穂後25日以降に最終かん水
を入水(落水は出穂28日以降)
異常高温時には、速やかに一時
湛水～高温障害を防止

Point 5

～適切な生育診断による穂肥施用
→品質・収量を確保します～

① 穂肥は出穂22～20日前と12～
10日前の2回に分けて施用→
1回あたりの施肥量はN：1.0～
1.5kg／10a、合計 2.0～3.0kg
／10aを目安とする

② 2回目の穂肥は確実に施用する

③ 急激な葉色低下がみられた場合は
追加穂肥を施肥(極端な多肥栽培
を抑える→病害発生・被害の抑制)

Point 6

～適期刈取、適切な作業により
高品質米に仕上げます～

① 出穂後の積算気温：975℃を参考に
籾の黄化率(85～90%)を確認して
適期に収穫する
→異常高温が予想される場合には
早めの収穫を検討する

② うるち品種や病害粒を混入させな
いため、清掃等対策を徹底する

③ 収穫後は早めに土づくり資材の
投入+稲わらの秋すき込み

《施肥のめやす》

(成分 kg／10a)

区分

時期

N成分

備考

土づくり

収穫後

—

稲わら秋すき込み
有機質・けい酸質資材

基 肥

～田植え

4.0～5.0

地力に応じて

穂肥1

出穂22～20日前

1.0～1.5

遅れずに施肥→籾数確保

穂肥2

出穂12～10日前

1.0～1.5

しっかり施肥→登熟向上

合 計

—

6.0～8.0

*一発基肥
トータルN：6.0～9.0kg

《生育のめやす》

生育ステージ

時期

草丈
(cm)

茎数
(本/m²)

葉色
(SPAD)

1回目穂肥

7/7

65

430

36.0～38.0

2回目穂肥

7/17

—

—

出穂期

7/29

75
(稈長)

350

—

《品質向上・収量確保目標》

玄米1等級比率

90%以上

10a当たり収量

570kg

《収量構成要素》

収量
(kg/10a)

1穂籾数
(粒)

穂数
(本/m²)

m²籾数
(百粒)

登熟歩合
(%)

千粒重
(g)

570

86

350

300

84%

22.5

《品種特性》

早晩性

耐倒伏性

葉いもち

穂いもち

紋枯病

早生

やや強

弱

弱

やや弱